

---

# 僕と俺の学校生活

ユララ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と俺の学校生活

### 【Nコード】

N5922D

### 【作者名】

ユララ

### 【あらすじ】

二重人格の少年を中心としたお話。恋愛はまだまだ先の話で、コメディというわけでもないかも……。じゃあ、どんな話かって？そりゃあ、読めば分かる話さ。【停滞中です。申し訳ありません】

(1) 俺と友×2

桜の花びらが一枚・・・二枚・・・三枚・・・  
よんまい・・・。

私立真質<sup>またち</sup>高等学校。

全校生徒およそ600人という私立高にしては比較的少ない人数の学校である。

その真質高校では入学式も無事終了し、今日から本格的に授業が始まったばかりである。

「はい、止めてえ」

そんな声で今まで机にかじりついて問題を解いていた二年A組の生徒たちは一斉にペンを置く。教室のあちこちからは「無理だあー」と叫ぶ男子生徒や「ねえ、どうだった？ 私結構自信あるかも」という女子生徒の声で溢れている。

春休み明けの確認テストというものが今まで行われていたわけだが窓際の一番前の席<sup>すなわ</sup>。即ち出席番号一番の生徒、青鹿<sup>あおが</sup>名雪<sup>なゆ</sup>は絶望していた。

「『僕』の馬鹿あ」

この少年名雪は二重人格だ。一人称が『僕』の場合は明るく人懐っこい可愛い系に部類される。そして、一人称が『俺』の場合はクールでスポーツも勉強もそつなくこなすカッコイイ系に部類される。しかし、そんな『俺』は『僕』が起こした不祥事の所為でことごとく苦勞している苦勞人である。

そして今回はテスト前までは『僕』が出ていたのだが『僕』には少々退屈だったのか寝てしまっていたのだ。問題を解かぬまま。まあ、寝ていて気付かなかった俺も悪いんだけどさ。

「名雪」

そう言いながら俺の肩にポンつと手を置いて哀れみの視線を送ってきているのは由良栄夢だ。栄夢とは一年の時に同じクラスになってからの仲だ。因みに出会いは可愛いものの好きの『僕』が背が小さい栄夢に抱きついたのが始まりだ。

「やっぱりね。テストが始まって直ぐに雪が寝たからこうなるような気がしたんだ」

皆は二重人格だと名前が紛らわしいからという理由で『僕』の方を雪と呼ぶ。俺としては名雪のまま通してくれてもいいんだけど。

しかし、『僕』よ。問題を解いていないのはかなーり妥協しても名前も書いていないのはどうかと思うぞ。こうなると『僕』の方は最初からやる気なかったな。結局補習か宿題をやるのは俺なんだから。こんなことなら今日は俺が最初から出れば良かった。表で笑って心で泣いて。

「なんだよなんだよ、お前らしけた面してんじゃねえよ」

どこからともなく現れ俺と栄夢の背中をバンバンつと叩いてるこ  
いつは武都風勇<sup>むとふうゆう</sup>。風勇も栄夢と同じで一年の時に同じクラスになっ  
たのが縁で今に至る。因みに風勇との出会いは『僕』が餌付けされ  
たことから始まる。同じ自分としてはいささか情けない気もするが。

「風勇は仲間だよなっ」

栄夢は頭が良いから聞く気にもならなかったが風勇とは時々補習  
が被るからな。補習仲間だな。

「半分ぐらいか？」

疑問系で聞かれても困るし・・・風勇が半分つ。五割つ。二つに  
一つは正解つ。・・・終わったな。

「まっ、いつものことじゃないか」

「そうそう」

いつものことで済まされようとしていることが嫌なんだが。こい  
つらは所詮他人事だと思って。

「だって他人事じゃないか」

見事なシンクロ・・・じゃなくてっ、

「お前らいつの間に読心術を身につけたんだ」

二人が俺の知らないところで密かに特訓してきたということか。

ならば俺の思っていることはこいつらには筒抜け。これからこいつらの前では下手なことは考えられんな。気をつけねばつ。

「お前また変なこと考えてるだろ」

「そうそう毎回同じことやってたら分かるし、それに・・・」

「それに？」

「「名雪は顔に出やすい」」

栄夢と風勇はどこかの名探偵が犯人を指差すように俺にビシッと人差し指を向けてそう言った。

「えいつ」

俺はそんな掛け声とともに二人の手を叩いた。少し強めに叩いたため栄夢が痛がっているがこの際無視だ。

「人に向けて指を指したらダメだと教わらなかったのか。だから最近の子どもは・・・」

自分の世界に入ってしまった名雪に栄夢、風勇はお手上げ状態。こうなった名雪は喋らすだけ喋らさないと機嫌が急降下してしまうのだ。それにしても自分も最近の子どもだということに気付いていないのはどうなのだろうか。

## (2) 僕と友×4

「名雪<sup>なゆ</sup>、栄夢<sup>えいむ</sup>、部活へ行くぞっ」

ホームルームが終わった途端に大きな声で僕と栄夢君に話し掛けてきたのは同じクラスの風勇君。

「僕は名雪じゃなくて雪<sup>ゆき</sup>だよー」

いくら体が同じだからって名雪と僕ぐらい見分けて欲しいよねっ？  
間違えられるのってちょっとへこむんだから。

「ああ、すまんすまん。アメやるからな」

そう言っただけで風勇君が取り出したのは僕の大好きなアメ。

「風勇君は仕方ないなあ」

アメ一つであっさり態度が変わる僕だけど、誰でもこんな風じゃないんだよ。二人を信頼してるからこそなんだよねー。名雪は恥ずかしがって言わないけど名雪も二人のこと信頼してるんだからね。

「さあ、雪行こう」

黄色のアメを眺めていた僕だけど栄夢君に促されて二人に続いた。アメは食べても美味しいし、光に当てて眺めるのも好きなんだよねー。黄色ってことはレモン味かな？

「新入部員来てっかなあ」

そう呟いたのは風勇君。僕ら三人は天文部員なんだよ。天文部は僕らと後二人の女の子で構成されてるんだよ。おまけに僕ら五人で天文部作っただんだよね。部長は風勇君なんだよ。それで副部長は栄夢君なんだ。

「うーん、あのポスターじゃなあ」

僕の方をチラッと見ながら栄夢君がそう言った。なんでだろ？僕は真面目に『星になりましょう』って目立つように赤のマジックで書いただけなのに???

「大丈夫だ。俺の従妹が入ってくれるみたいだ」

びっくりだよー。

「風勇君に彼女がいたなんてー。栄夢くーん、僕捨てられちゃった」

「おー、よしよし。風勇はロリコンでシスコンだったんだよ。仕方ない」

「止めてくれ、お前らが言うことは皆なぜか信じてしまう節があるんだ」

「えー、冗談じゃないのにー」

「余計に悪いわっ」

わっ、唾が飛んできた。風勇君ばっちいよ。その彼女に嫌われち



やうよ。

「風勇も雪もいつまでも争そわない。もう着いちゃったよ」

栄夢君も楽しんでたくせに……。まあ、いいや。だって、扉の向こうには……。、

「雛ちゃん」

宇都夷雛ちゃん。僕が抱きついても唯一文句を言わない子なんだ。もとから無口、無表情というのもあるかもしれないけどね。雛ちゃんは栄夢君より小さくて可愛いんだよ。それで大体難しい本を読んでいるんだ。

「……おはよう」

雛ちゃんは本から目を外してそれだけ言うとまた本に没頭し始めた。これはいつものこと。そして、もう放課後なのにおはようというのもいつものこと。一度何でおはようなのか訊いてみたらその日に初めて会った人には昼間だろうと夜だろうとおはようって言うんだって。

「うん。おはよー」

だから僕もおはよーなんだ。僕は雛ちゃんが座っているソファの隣に改めて座りなোস。そして、キヨロキヨロ。

「夕陽ちゃんはまだなの？」

夏野夕陽ちゃんがもう一人の女の子の天文部員。スポーツが得意

なんだけどなんでか天文部に入ってるんだ。僕は嬉しいんだけどね。

「そっぴゃいないな」

風勇君が確認するようにそう言う。夕陽さんはムウドメエカアだからね。そんな風に思っていると廊下からドタドタと駆ける音が聞こえる。すぐに分かる。

「夕陽ちゃんだあ」

僕はそう言つて扉の前に準備する。3・・・2・・・1・・・

『ガラッ』

「ごめん、遅れゝガッフ」

息も絶え絶えな夕陽ちゃんにダイビング。

「「「ガッフ????」」」

風勇君、栄夢君、雛ちゃんの心が一つになった瞬間でした。一方で抱きつかれた夕陽ちゃんは・・・

「あ、今日は雪なのね」

至って冷静だった。そう、天文部にとって雪の抱きつきダイビング行為はいつものことなのだ。

「夕陽ちゃん今日はどうしたの？ 僕、心配したんだよ」

そんな天文部にもどうしても慣れないものがあつた。それは雪の満面の笑顔と潤んだ瞳で見つめられることだった。

「ああ、ごめんねー雪。ちょっと呼ばれててね」

これも天文部ではいつものことなのだ。夕陽はモテるのだ。性別を問わず。そんな夕陽は今まで告白をOKしたことはない。理由・ときめかないから。そんな夕陽だが雪の潤んだ瞳に耐えられず・

「ごめんなさい」

特に夕陽が悪いわけではないのだが何となく謝らなければならぬような気になるから不思議なのだ。天文部の七不思議の一つになっている。

「・・・夕陽・・・綺麗だ」

今までジッと夕陽を見つめていた雪がそんなことを口走つたのだ。

「「「「!!!!!!?????」」」」

綺麗だ、と言つた雪の顔は何よりも美しくて赤かつた。

「「「「（ん？ 赤い）」」」」

この場での赤いは照れてではない。廊下側の窓の外には赤々とした夕焼けが澄み渡っていた。

「皆ー、写真撮ろつよ」

天文部にはカメラがある。時を手に入れることは出来ないけど、  
今この一瞬を止める方法はある。

「だな」

「だね」

「・・・うん」

「・・・／／／」

夕陽の顔は夕焼けとは関係なく赤かった。心臓がドキドキとうるさかった。幸いにも皆が気付くことはない。カメラをタイマーでセツトした風勇が急いで並ぶ。後、二秒でシャッターがおりる。

2

「皆・・・」

1

「・・・だーい好きだよ」

「」「」「」  
「うん」「」「」

0

『パシャ』

写真に写ったのは皆のキラキラした笑顔。バックの夕陽も皆の輝きには敵わない。

### (3) 俺と僕と友×4

天文部。それは本来星を観察する部活だ。それだけ、というわけではないが活動内容の大半はそれだ。しかし、時たま天文部部长である風勇<sup>ふうゆう</sup>が思いつきで何かを始める時があるのだ。そして、それに悪乗りするのが夕陽<sup>ゆうひ</sup>さんなんだ。そうして、そのまま栄夢<sup>えいむ</sup>、雛<sup>ひな</sup>さん、俺、と巻き込まれていくのだ。

風勇の思いつきはある時はスパイゲームと名付けられた高度な缶ケリだったり(鬼は二人)、コソドロゲームと言って親分一人と子分四人に分かれて親分が命令したものを持ってこななければならないゲーム(お金を使うことは禁止、更に持ち出すところを誰かに見られてもダメ)だったりするのだ。

そして、今回風勇が考えたゲームとはその名もグラムゲーム。内容は重さを指定して、その重さに出来るだけ近い物を学校内で探すというものだ。今回は割と楽な方だ。走ったりすることもないし、無駄にドキドキすることもない。因みに一番値から遠い物を持ってきた人は全員にハンバーガーを奢るといふ罰ゲーム付きだ。こういうのは皆がやる気を出してやらないと面白くないから罰ゲームがあるのだ。今回の指定グラムは700グラム。

俺・・・本・・・895グラム。

栄夢・・・地球儀・・・688グラム。

風勇・・・教頭のカツラ・・・701グラム。

雛・・・サッカーボール・・・440グラム。

夕陽・・・700ccの水・・・700グラム。

「わーい、名雪<sup>なゆ</sup>の奢りだね」

そんなことを言ったのは夕陽さんだ。

「ちよつと待て」

自分でも驚くぐらい低い声が出たぞ。夕陽も普段の声と違うのを微妙に違うのを感じとったのか少し汗をかいてるようにも見える。風勇のカツラにもつつこみたいがそれよりつつこまなければならぬのは明らかに夕陽だ。計量カップで700cc計って持つてくるのはいかなものなのだろうか。そんなの700グラムになるに決まってるじゃないか。

「言い訳があるなら言ってみたまえ、夕陽クンっ」

当社比三倍の笑顔で見つめると、夕陽さんの汗の量も三倍になる。

「まあまあ、二人とも落ち着け。名雪も男なら素直に負けを認めろ」

俺と夕陽さんの間に入って来たのは風勇だ。

「そうそう、諦めが悪いよ」

栄夢までそんなことを言う始末。俺がとった行動は……

「あれっ？ 名雪はもういいの？」

突然の選手交代に戸惑う雪。

「逃げた!?!?!?!?!」

「あつ、雛ちゃん」

ボフツという音を立てて抱きついた僕。雛ちゃんは頭をナデナデしてくれる。子ども扱いされてるみたいだけど雛ちゃんから見れば僕は子どもだろうから何にも言えないんだよねー。

「と、とりあえずどうしようか？」

栄夢君が困ったようにそう言う。名雪が勝負で負けちゃったんだよねー。僕がやれば勝ってたと思うのになー。風勇君も夕陽ちゃんもどうしようか考えてるみたいだしねー。雛ちゃんはまだナデナデしてくれてるし。

「じゃあ、もう一回しようよー。次は1000<sup>もんめ</sup>刃ねー」

そう言って走り去って行った雪<sup>ゆき</sup>を見送ることしか出来なかったのは栄夢、風勇、夕陽だった。三人は一斉に首を捻る。

「『1000刃って何グラムよっ？』」

雛はというと・・・

「（・・・1刃はおよそ3・75グラムだから1000刃は3750グラム・・・）」

博識な雛さんでした。

結果、哀れにも栄夢君が奢ることになったそうです。

#### (4) 僕と俺×オセロ

「ねえねえ、そういえば風勇君<sup>ふうゆう</sup>が言ってた従妹の子は部活にこないの？」

僕は二、三日前に風勇君がそんなことを言っていたのを思い出してそう訊いた。

僕の隣を歩いてた栄夢君<sup>えいむ</sup>もうんうん、と頷いている。

部活は五人でも出来るけど人数が増えて友達が増えることは良いことだよー。けど、風勇君の従妹さん一人だけじゃ僕たちが一斉に卒業した時に困るよね。

「今日来るぞ」

何気なく風勇君が言ったけどそこは声を大にして言うところだよ。  
っ。

「お前なあ、そう言うことはあらかじめ言っておいてくれよ。一人で部室にいたらどうするんだよ」

僕なら寂死しちゃうかも・・・それはいくら僕でもないよね。僕には名雪<sup>なゆ</sup>がいるしね。一人でも二人だもんね。

「言ってなかったっけか。そりゃあすまん。けどそんなことでめげる我が従妹ではないっ。あいつならサバイバル訓練受けてたことがあるから・・・ん？ サバイバルか、それいいな。今度はサバイバルゲームをしよう！」

サバイバル訓練ってなんだろ。面白そうだから僕も教えてもらおう



うかな？ それにしても風勇君って遊ぶことばかり考えてるよねっ。  
だから他の生徒たちから遊部あそぶなんて言われたりするんだろっね。

「サバイバルなら迷彩服と・・・」

一人の世界に入り込んでしまった風勇君は放っておこう。大丈夫。  
風勇君はちよつとやそつとじゃ死なないんだから。

「栄夢君、新入部員さんって一人だけかなあ」

ポスター描いたの僕だから少し、ほんのちよつぴりだけ責任感  
じちゃうよ。僕が俯き加減に歩いていると栄夢君は僕の頭をポンポ  
ンつと叩いた。

「気にしたらダメだよ。元々、天文部なんてマイナーなんだからさ。  
皆、いつからか空を見ることを忘れちゃって下ばかり向いて生きて  
しまうものなんだよ」

うう、難しい。けど、少し分かるような気もする。子どもの頃  
とかは空を見て星を眺めて、月のウサギを探して、飛行機雲を目で  
追って・・・けど段々年を重ねていくと上を見上げることに疲れち  
やうんだ。だから下を向いちゃうんだ。自分より下を見て何かを得  
たいんだ。見つけたいんだ。下を向くことでなくした大きな夢を。

「ロケット飛ばそうよっ。ドドーンとさ」

僕たちはまだ見失ってないんだ。だから夢に届くようにどこまで  
も飛ばしロケットを飛ばしたいな！。

「それいいぞっ。良くやったぞ雪っ」

さつきからずっとブツブツ言ってた風勇君がロケットって言う言葉に反応した。そんなにキラキラした目で見られると照れちゃうよ！。

「ロケットか、それもいいかも」

栄夢君も賛成してくれた。雛ちゃんひなと夕陽ちゃんゆうひもきつと賛成してくれると思う。

「アッツイー！！！」

部屋に入る直前にそんな大きな声が聞こえた。声の主は夕陽ちゃんだね。僕はそんなことをのんびりと考えていたんだけど、栄夢君はその声に慌ててドアを開けて部屋に飛び込んだんだ。続いて風勇君もどうしたのかと入って行く。もちろん僕も続いたよ。

部屋に入ると夕陽ちゃんは普通にソファに座ってる。その手にはコップを持って。そういえば夕陽ちゃんって猫舌だったっけ。

「雛ちゃん」

僕はそう言っただけで固まってる栄夢君の横を通り抜けていつも通り本を読んで雛ちゃんに抱きつく。一日一回はこうしないとね。

「・・・おはよう」

雛ちゃんも動じることなく挨拶してくる。

「うん、おはよう」

風勇君は心配して損したって感じでソファに飛び込んだ。いつも占領しているソファに。けど、今日は先客さんがいたみたいだね。ソファの端っこにちょこんと座っていた一年生らしい女の子の膝の上に頭が乗った。風勇君はあれっ、いつもより柔らかいなぁって女の子の太ももを触ってる。風勇君・・・変態さんだ。女の子はワナワナと肩を震わしてるし。ああ、あれだね、

「せくしゃるはらすめんと」

「・・・セクハラ」

僕と雛ちゃんの言葉でスイッチが入っちゃったみたいだよ。

「兄さんっ、少しいいかな」

女の子は地を這うような声でそう言ったけど最後は疑問系じゃなくてどちらかといえば命令形のような気がしたんだ。その証拠に女の子は風勇君の首根っこを掴んでズルズルと引き摺りながら部屋を出てっちゃった。それから開けっ放しのドアを栄夢君がそつと閉めたのが印象に残った。

「ま、待て。俺はお前があそこに座ってるとは知らなかったんだ。だからあれは事故なんだ。いや、その・・・すまん・・・ギヤアアアあああああああ！！！！！！！！」

ドアの外がなんだかうるさいけど皆気にしない方向みたい。雛ちゃんも本を読んでるし、夕陽ちゃんはお茶を飲んでるし、栄夢君は地球儀をぐるぐる回してる・・・暇なんだね。

「それでは第三回オセロ大会をやるー」

僕の場合違いとも言える言葉でも今は皆がありがたいという感じでワラワラ集まって来る。天文部にはないものはないからね。オセロぐらい十セット常備してあるんだよ。

「いいねー、雛もやるでしょ。あと、栄夢に拒否権はないから」

「・・・やる」

「えっ、強制なのっ」

雛ちゃんも少しやる気だし、栄夢君もそんなこと言ってるけど楽しそうだしね。夕陽ちゃんはノリノリだしね。僕も負けないけど。

「はいはい、罰ゲームはどうするのー」

僕がそう言うのと夕陽ちゃんが少し考えるような仕草をしてから言った。

「風勇のあと始末・・・」

ニヤリって言葉が似合いそうな顔でそう言った。その言葉で和気藹々という感じだった雰囲気が一瞬と固まっちゃった。それぞれがやる気をフルで出したような感じだった。

そうして始まった総当たりのオセロゲームの結果は・・・

第一位 三勝 雛ちゃん

頭腦的作戦で勝ったみたいない感じだったよ。雛ちゃん強い。

第二位 二勝一敗 栄夢君

のほほんしてて勝てそうなのに最終的には何故か勝ってるんだよねー。ふっしぎー。

第三位 一勝二敗 夕陽ちゃん

やる気が空回りしてたっぽかったのに勝てなかった。・・・僕弱い？

第四位 三敗 僕

僕・・・才能ないかも。ということであとは名雪に交代。

「ちょっと待て。俺は負けてないから生ゴミの処理なんかしないぞ」

俺は負けてない『僕』が勝手にやったことなんだからな。そんな俺の思いを察してくれたのか夕陽さんが俺の肩に手をポンっと置いた。

「男は諦めが肝心なのよ」

察してねえ。空気読めよ。まあ、最初から期待はしてなかったさ。

「・・・哀れ」

雛さん。何気にズキンつとくるのですが。

「さすが苦労人の名を欲しいままにする名雪だ」

栄夢もそう感慨深げに言わないでくれ。泣けてくるんだ。

「じゃあね、今日は楽しかったよ」

「ああ、お前らはな」

「・・・惨め」

「だと思っなら」

「や・・・」

「でしょうね」

「まあまあ、明日アメ持ってきてやるよ」

「別に俺は『ボタンっ』・・・最後まで聞いて下さい」

思わず丁寧語でそう言ってしまった俺。風勇？ ああ、雑巾のよう  
うにボロボロになっているところを見つけました。もちろんほった  
らかしにしてきましたけど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5922d/>

---

僕と俺の学校生活

2010年10月14日17時21分発行